〈シンポジウム 2023 年度企画の趣旨〉

トマス・アクィナス（Thomas Aquinas, 1225−1274）の哲学および神学には，いったいどのような意義や価値を見いだすことができるだろうか。20 世紀以降のトマス・アクィナス研究は，もっぱらアクィナス自身の考えを忠実に浮かび上がらせることに集中し，それを最重要課題として進んできたと言えるだろう。そして，その研究成果は，かなりの水準に達したように見える。しかし他方で，アクィナスの哲学や神学に対する批判的な検討への目配せは，十分に行われてきたと言えるだろうか。

もちろん，近年では，トマス・アクィナスの「受容」をめぐる論集が出版され，アクィナスが与えた影響に関する関心は高まってきていると言えるのかもしれない〔Levering, Matthew and Plested, Marcus (*eds.*) (2021) *The Oxford Handbook of the Reception of Aquinas*, Oxford University Press〕。しかしながら，例えば，アクィナスのオリジナリティーが主張されるとき，アクィナスの思想が負っているギリシアやアラビアの過去の哲学的な遺産との関係は，正当に評価されてきたと言えるのだろうか。反対に，近現代の哲学者や神学者たちによるアクィナスへの批判に対して，時代的・環境的な制約によるアクィナスの擁護論が主張されるとき，アクィナスの哲学や神学がもつ理論的な耐用性ないしは普遍性を過小評価してしまってはいないだろうか。

以上のような問題意識に基づいて，本シンポジウムでは，中世スコラ哲学のいわば〈内部〉と〈外部〉とから，トマス・アクィナスの哲学および神学に対する疑義を呈し，その疑義に対してアクィナスはどのように解答することが可能であるのかということを，2023 年度と 2024 年度の二年間にわたって検討してみたい。このように，アクィナスの哲学や神学に対する批判的な再検討を迫ることによって，アクィナスの哲学と神学がもつ本当の，そして本来の価値を浮き彫りにしていきたいということが , 今回のシンポジウム全体の趣旨である。

このような趣旨に沿って，一年目の 2023 年度は，中世スコラ哲学の〈内部〉から，すなわち，アクィナスと同時代の人たちの観点から，アクィナスの哲学および神学に対する批判的で建設的な議論の構築を行なっていく。

まず,「連動報告」においては，アリストテレスの哲学が西欧世界に流入するより前の時代において,「無からの創造（creatio ex nihilo)」が，哲学と神学という枠組みの中でどのように論じられていたのかを，藤本温氏に提示してもらう。

次に,「シンポジウム」本体においては，アラビア哲学とアルベルトゥス・マグヌス（Albertus Magnus, ca.1200–1280）の視点から，トマス・アクィナスの「創造論」における哲学と神学の位置づけをめぐって，小林剛氏に疑義を呈してもらう。また, フライベルクのディートリヒ（Theodoricus Teutonicus de Vriberch, 1245/50–1318/20）の視点から，トマス・アクィナスの「聖体論」における哲学と神学の位置づけをめぐって，山崎達也氏に疑義を呈してもらう。そして , 以上のような論点に対して提示されたトマス・アクィナスに対する疑義に立ち向かう形で，アクィナスの視点から，アクィナスであればこう解答したであろうという論陣を川添信介氏に張ってもらう。

なお，最終的には，トマス・アクィナスの哲学および神学がもつ限界と可能性をさまざまな角度から詳らかにすることを目指しているが，それと同時に，われわれが研究している「哲学」という知的な営みは，そもそもどういったものであるのかを見つめ直す契機となれば幸甚である。

［2023–24 年度シンポジウム企画委員：
小林　剛，阿久戸 義愛，辻内 宣博（文責)］